校長室だより～燦燦～ №７９１

学習カルテ

2023.7.12

もう３０年近く前の話だが、国語の授業で「国語学習カルテ」なるものを取り入れたことがあった。個を生かす、個が生きる、学習の個性化、指導の個別化という流れに沿った実践である。発想は簡単である。お医者さんのカルテのイメージである。国語の授業における指導の記録を残すのである。

例えば、小説や物語などの文学的文章ではどうか。説明的文章ではどうか。文章は書けるのか。自分の考えを人前で発表できるのか。音読はできるのか。漢字は書けるのか。古典への興味はどうか。これらのことを指導する度にカルテに累積していく。

すると、小説の読み取りが苦手だったのが、こういった指導したら登場人物の心情がわかるようになったなどのように変容が見えるようになる。大事なことは、カルテの機能である。次の指導者に引き継ぐことができるという点である。

当時の私は、大規模校に勤務していた。一つの学年の国語の授業を３人で担当していた。生徒は、３年間で複数の国語担当者と出会う可能性が高くなる。学習カルテを使えば、次の国語担当者はどうだろうか。一人一人の生徒はもちろんのこと、集団としての傾向もつかむことができる。授業をする上での手だてが変わってくる。

このカルテの名称を「学習カルテ」としたのは、カルテの内容を生徒にもわかるようにすることからである。授業担当者だけが使うのであれば、指導カルテでよい。ここが、お医者さんのカルテとの違いである。生徒は、自分の学習の足跡として、学習カルテを見るようになる。こんなことができるようになった。ここが、まだまだ課題だ。指導者と生徒とが、カルテを通して、これからはこんなことに取り組んでいこうという確認ができる。ということは、お医者さんと患者さんと同じように、生徒と授業担当者との面談が必要になる。学習カウンセリングである。

このようなことを考えた。若かったので、まだ体力があった。これを４クラス、約１５０名分やるわけである。カルテをつくるだけでも至難の業である。学習カウンセリングはというと、やろうとしたが、できなかった。１年間限定だとしても、やるのはむずかしい。何でもそうだが、継続できなければ、さほどの意味はない。持続可能なことがポイントである。

今、振り返ると、随分と無茶なことをしていたと思う。だが、やろうとしたことが間違っているとは思わない。現実的ではなかっただけである。一応、学習カルテは作成して、それなりに活用はした。たまたま実践発表の機会があった。学習カルテの実践報告をした。聞いている人はどう思ったのだろう。やった方がいいのはわかるが、無理だと判断したのだろうか。

先生方に、学習カルテを勧めることはしないが、その発想は大事にしたい。国語の授業担当者として、一人一人の生徒が、何ができて、何ができないのかを把握しておくことは重要である。そして、生徒に、あなたは国語の授業で、こんなことができるようになりましたよと知らせることは、もっと大切なことだと思う。当時の国語学習カルテは、私の書斎で眠っている。